

# 終助詞「よ」「ね」の音調の地域差について

—東京・岡山・香川の比較—

轟木靖子・山下直子

## 1 はじめに

日本語の話し言葉において、文末の表現形式やそれにもなう音調は、話し手の心的態度を示すという点で大きな役割を果たしている。

文末で使用される形式は様々であるが、この中で、終助詞は話し言葉でのみ使用されるという点と、文末音調一般に見られる音調と意味・機能の対応がかならずしも見られないという点において、単なる述語形式で終わる文とは異なる枠組みを考える必要がある。

終助詞は国語学・日本語学において以前から扱われてきた歴史があるが、それは主として標準語・共通語を対象にしたものとなる。しかし、実際の話し言葉で使われる終助詞は、その話し手や地域の方言で使われている文末にあらわれる終助詞類の影響を受けていると思われる。

各地の日本語母語話者は、普段の言語生活においてはその地域の方言の文末詞を用いたり、場面によっては共通語(的な言い方)を用いたりする。轟木(2008)では、東京語の終助詞の音調と意味・機能の対応について内省をもとに考察をおこない、轟木・山下(2008)では、東京・大阪、岡山、香川で成育した日本語母語話者への聞き取り調査から、日本語教育で指導するうえで重要となる共通語としての音調を抽出することを試みた。

しかし、実際の言語生活では、各地の方言話者は地域の方言と全国的な共通語を場面によって使い分けしていることが多く、ある意味・機能に対応した音調の判定は地域差が少なくない。

そこで、本研究では、首都圏(東京・神奈川・埼玉)と岡山、香川の3地域でおこなった終助詞の音調の聞き取り調査の結果をもとに、終助詞の音調に対する意味・機能の理解について、日本語母語話者間でどのような地域差があるかという視点で分析・考察をおこなう。日本全国に通じる共通語としての音調だけでなく、地域で特有に理解されている音調を整理することは、日本語の終助詞の音調について今後研究するうえで重要であると考えられる。

## 2 終助詞の音調について

### 2.1 終助詞の音調の特殊性

文末音調の種類およびその役割については、川上(1963)、吉沢(1960)や郡(2003)での考察が詳しい。川上(1963)では、第一種から第四種、および第五種を認めている。この中の第一種と第三種は吉沢(1960)では昇調1、郡(2003)では疑問型上昇と呼ばれる。文末で用いられることにより、疑問や質問、問い返しをあらわす。

川上(1963)の第四種、吉沢(1960)の昇調2は郡(2003)では強調型上昇と呼ばれる。文末で用いられることにより、その語(句)を強調し強く訴えかけるものである。

いっぽう、文末が下降する場合については、吉沢(1960)は降調、郡(2003)は顕著な下降調と上昇下降調を認める。郡(2003)では、下降調の例として、間違っていたことが分かったときの、*アーホントダ↓* (注1)や意外に早く終わったんだなあという意味で言う*モーオワッタ↓*などを挙げ、音調の機能としては、「意外だと感じたことを示すものと一応見ておく」としている。

上昇下降調は、郡(2003)によれば「聞き手の注目をひきつけ、訴えかける意図を表す」もので、「早くしてくれ」の意味で親しい者に*バヤ↑ク↓* (注2)などと要求する場合などに見られるという。

以上は文末に使われる音調のあらゆる機能であるが、終助詞の音調はこのような音調と機能の対応がかならずしも見られない点にその特殊性がある。

たとえば、川上(1963)の第一種、吉沢(1960)の昇調1、郡(2003)の疑問型上昇はいずれも疑問文の典型的な文末に見られる上昇音調である。文末に述語形式がそのまま用いられる場合(名詞(+だ)、形容詞、動詞など)、この上昇音調で発話されることによって疑問あるいは問い返しの発話となる。「帰る。」に対する「帰る？」はこの音調によって発話される。しかし、上村(1989)や郡(2003)でも述べられているが、「帰るよ」という発話の「よ」を同じ音調で発話しても疑問や問い返しの意味にはならない。それは「よ」の形態的意味に由来するものであり、同様に他の終助詞についても、音調との意味・機能の対応は単なる文末音調とは別に考える必要がある。

## 2.2 終助詞の音調の記述方法

本稿では、発話の音調は近畿音声言語研究会(2008)に基づき、以下の記号を用いる(注3)。

モーラ間の上昇	「
モーラ間の下降	」
アクセント核による下降	´
疑問上昇	↗
アクセント上昇	↑
下降	↓
上昇下降	↕

終助詞の音調は、前接の語の最終拍に対する接続の仕方と終助詞の拍内音調の組み合わせによって終助詞の音調を記述することができる。

前接の語の最終拍に対する接続の仕方を区別するのは、例えば同じ上昇音調であっても、「行くね」(念押し)と「行くの」(質問)を比べたとき、「ね」は前接の高い拍「く」にそのままの高さでついて上昇するのに対し、「の」は前接の高い拍「く」に対して低く接続する、というような違いがあるからである。前者を順接、後者を低接と呼ぶが、このもとになっているのは、和田(1969)の助辞接辞のアクセントの概念である。前接の語が無核(平板型)の場合は、サ「クラヨ(順接)とサ「クラ」ヨ(低接)のように、音声的に違いが明確になるが、有核(頭高型、中高型、尾高型)の場合は、アクセント型に従って接続しても低い拍になるので、音声的には順接と低接の区別は明確ではなくなる(カ「ラスヨ、タ「マ'ゴヨ、ヒ「カリ'ヨ)。

したがって、たとえば「雨だよ」をア'メダヨと発話した場合の「よ」は、順接か低接か区別がつかず、これを確かめるためには、同じ機能を持つ「よ」が「風だよ」という発話でカ「ゼダヨとなるかカ「ゼダ」ヨとなるかを見なければならぬ。

拍内音調については、聴覚的に上昇も下降もしない平坦、上昇、下降、上昇下降の4種類のほか、上昇については、前節で見た先行研究をふまえ、疑問上昇とアクセント上昇の2種類を考

る。たとえば、「帰るの?」と尋ねる発話の末尾は疑問上昇、「帰るって言ったら帰るんだ!」と主張する「帰るの!」の末尾はアクセント上昇である。アクセント上昇は、疑問上昇に比べると、音声的に上昇の開始点が早く、全体の長さも短い(注4)。

以上から、順接および低接のそれぞれについて、平坦、疑問上昇、アクセント上昇、下降、上昇下降の5種類を想定することにより、理論上は10種類の音調が可能となる。しかし、すべての終助詞がこの10種類を取るわけではない。なかでも、低接・下降は、低接・平坦のバリエーションと考えるほうが自然である。10種類の音調から低接・下降を除いた9種類について、「やるね」を例に図1から図3に示す。

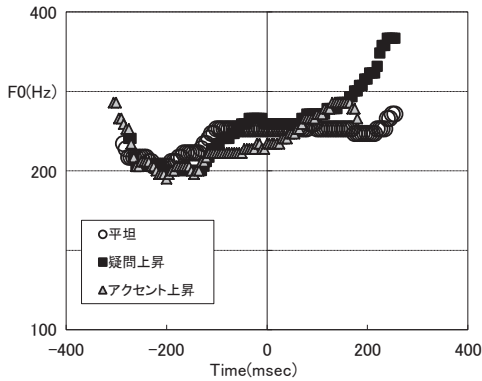


図1 順接・平坦, 順接・疑問上昇, 順接・アクセント上昇

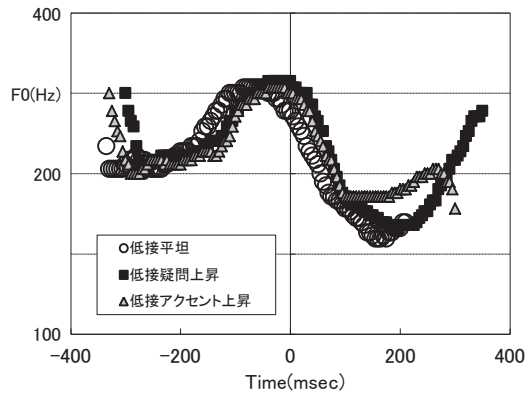


図2 低接・平坦, 低接・疑問上昇, 低接・アクセント上昇

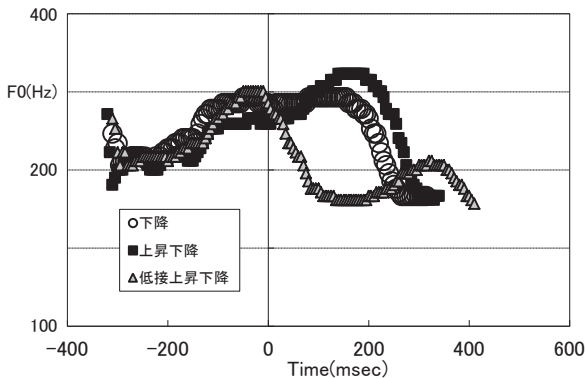


図3 順接・下降, 順接・上昇下降, 低接・上昇下降

図1～図3 「やるね」音調図

各図の「ね」の先頭部分を0msecに合わせ、重ねて表示。録音にはTEAC DA-P1 (DATレコーダ)、Shure MX184 (マイク)、DATテープを使用し、音声分析ソフト「音声録聞見」(ダイテル、現C&Dテクノロジーズ)を使用してCSV形式で保存したものを100Hzをベースに対数表示している。

### 3 終助詞の音調の聞き取り調査

#### 3.1 調査の概要

「やるね」「桃だよ」のように、短い語句に「よ」「ね」をつけた文の終助詞の部分を複数の音調で読んだCDを聞いてもらい(不自然にならない程度に前接の語句の部分の音調の高さがあまり変わらないよう注意して読んだものを用いた)、各発話について、提示された設定での発話としてふさわしいと思ったら○をつけてもらった。その場合、自分が使わなくてもそのように聞こえれば○を

表1 被調査者(人)

地域		回答者		
		男性	女性	計
首都圏	東京	9	9	18
	神奈川	3	3	6
	埼玉	1	3	4
岡山		1	15	16
香川		2	9	11
計		16	39	55

つけ、複数○をつけても、あるいは一つも○がつかなくてもかまわないことを伝えた。調査時間は15分程度であった(注5)。

被調査者は東京、神奈川、埼玉、岡山、香川で成育した日本語母語話者55名(いずれも大学生)である。このうち、東京、神奈川、埼玉の回答者を首都圏として集計、比較をおこなう。詳細を表1に示す。

### 3.2 調査の内容

調査した文、終助詞の音調、設定の内容は以下のとおりである。Lは低接をあらわし、Lがついていないものは順接であることをあらわす。疑上は疑問上昇、ア上はアクセント上昇をあらわす。調査CDでの順序はここに示したとおりではない。

#### (1) 「桃だよ」

- ① 桃の花が咲いているのを見つけて、いっしょにいる友人に教えるとき
- ② 「あれ、梅？」と聞かれて、「梅じゃなくて桃だよ」と言うとき

モ「モダヨ(平坦)、モ「モダノヨ(疑上)、モ「モダヨ↓(下降)、モ「モダ」ヨ(L平坦)

#### (2) 「やるよ」

- ① 「誰かこの荷物運んでくれる？」と、言われて、自分がやるつもりで「やるよ」と言うとき
- ② 時間が来てもゆっくりしている仕事仲間に、「早くやろう」と言うつもりで言うとき
- ③ 「早くしろ」と何度も言われて「うるさいなあ、ちゃんとやるよ」と言うとき

ヤ「ルヨ(平坦)、ヤ「ルノヨ(疑上)、ヤ「ルヨ↓(下降)、ヤ「ル」ヨ(L平坦)、

#### (3) 「本当だね」

- ① 相手の話を聞いて、「今の話、本当だね」と確認するとき
- ② 相手の話を聞いて、「たしかにそのとおりだ。本当だね」と自分も賛成するとき

ホ「ントウダネ(平坦)、ホ「ントウダノネ(疑上)、ホ「ントウダ↑ネ(ア上)、  
ホ「ントウダネ↓(下降)、ホ「ントウダ」ネ(L平坦)

#### (4) 「やるね」

- ① 一つの絵を3人で描いていて、「私がここをやるね(=この部分に色を塗るね)」と言うとき

②太郎が100点を取ったと聞いて、「太郎、なかなかやるね」と感心して言うとき

ヤ「ルネ(平坦)、ヤ「ル<sup>ノ</sup>ネ(疑上)、ヤ「ル↑ネ(ア上)、ヤ「ルネ↓(下降)、  
ヤ「ル<sup>レ</sup>ネ(L平坦)

### 3.3 調査結果

聞き取り調査の結果を表2-1から表2-4に示す。表中の数字は、提示された設定で各音調に○をつけた回答者の人数及び同じ成育地出身者に占める比率(%)をあらわす。

### 3.4 調査結果の分析

#### 3.4.1 「よ」

「よ」は順接・平坦または上昇と低接・平坦により、①聞き手への新情報提示や注目要求等と②聞き手の意見に反する述べ立てや不満の表明のような使い分けがあると考えられる(轟木・山下(2013))。今回の調査では、①は、やるよ(1)「わたしがやる」(2)「早くやろう」桃だよ(1)『桃だよ』と教える、②は、やるよ(3)文句を言う、桃だよ(2)「梅じゃなくて桃だ」が相当する。表2-1に「桃だよ」、表2-2に「やるよ」の結果を示す。

この中で、やるよ(1)「誰かやってくれる人はいませんか」と言われて「私がやる」と答えるで

表2-1 桃だよ

提示 形式 地域	桃だよ(1)				桃だよ(2)			
	教える				梅じゃなくて桃だ			
	平坦	疑上	下降	L平坦	平坦	疑上	下降	L平坦
首都圏(人)	24	17	1	10	17	17	10	25
首都圏(%)	85.7	60.7	3.6	35.7	60.7	60.7	35.7	89.3
岡山(人)	12	14	0	1	7	11	7	15
岡山(%)	75.0	87.5	0.0	6.3	43.8	68.8	43.8	93.8
香川(人)	7	6	1	1	6	9	6	10
香川(%)	63.6	54.5	9.1	9.1	54.5	81.8	54.5	90.9

表中の%は、各地の人数(首都圏28人、岡山16人、香川11人)中に占める比率をあらわす

表2-2 やるよ

提示 形式 地域	やるよ(1)				やるよ(2)				やるよ(3)			
	自分がやる				早くやろう				うるさいなあ			
	平坦	疑上	下降	L平坦	平坦	疑上	下降	L平坦	平坦	疑上	下降	L平坦
首都圏(人)	26	22	4	8	21	21	4	4	7	10	18	23
首都圏(%)	92.9	78.6	14.3	28.6	75.0	75.0	14.3	14.3	25.0	35.7	64.3	82.1
岡山(人)	14	13	2	10	13	7	1	5	2	2	14	10
岡山(%)	87.5	81.3	12.5	62.5	81.3	43.8	6.3	31.3	12.5	12.5	87.5	62.5
香川(人)	9	8	0	7	10	8	1	2	1	2	8	10
香川(%)	81.8	72.7	0.0	63.6	90.9	72.7	9.1	18.2	9.1	18.2	72.7	90.9

表中の%は、各地の人数(首都圏28人、岡山16人、香川11人)中に占める比率をあらわす

表2-3 本当だね

提示 形式 地域	本当だね(1)					本当だね(2)				
	確認する					賛成する				
	平坦	疑上	ア上	下降	L平坦	平坦	疑上	ア上	下降	L平坦
首都圏(人)	13	24	5	6	0	10	1	24	16	0
首都圏(%)	46.4	85.7	17.9	21.4	0.0	35.7	3.6	85.7	57.1	0.0
岡山(人)	5	16	1	2	2	11	0	13	14	1
岡山(%)	31.3	100.0	6.3	12.5	12.5	68.8	0.0	81.3	87.5	6.3
香川(人)	4	11	0	1	1	4	1	8	7	0
香川(%)	36.4	100.0	0.0	9.1	9.1	36.4	9.1	72.7	63.6	0.0

表中の%は、各地の人数(首都圏28人、岡山16人、香川11人)中に占める比率をあらわす)

表2-4 やるね

提示 形式 地域	やるね(1)					やるね(2)				
	私がやる					なかなかやるね				
	平坦	疑上	ア上	下降	L平坦	平坦	疑上	ア上	下降	L平坦
首都圏(人)	17	25	12	1	0	8	2	21	28	1
首都圏(%)	60.7	89.3	42.9	3.6	0.0	28.6	7.1	75.0	100.0	3.6
岡山(人)	13	14	12	0	5	5	2	12	16	1
岡山(%)	81.3	87.5	75.0	0.0	31.3	31.3	12.5	75.0	100.0	6.3
香川(人)	10	11	7	0	0	4	0	7	11	0
香川(%)	90.9	100.0	63.6	0.0	0.0	36.4	0.0	63.6	100.0	0.0

表中の%は、各地の人数(首都圏28人、岡山16人、香川11人)中に占める比率をあらわす)

は、各地で順接・平坦または疑問上昇(ヤ「ルヨ、ヤ「ルノヨ)が8割以上の回答者に選ばれていたが、岡山と香川では、低接・平坦(ヤ「ル」ヨ)が6割強の回答者に選ばれており(岡山62.5%(16人中10人)、香川63.6%(11人中7名)、首都圏の28.6%(28人中8人)と差が見られた( $t(53) = 2.67$ ,  $p < .05$ )。同様の音調が用いられる、桃だよ(1)「あれ、何?」と聞かれて答えるときでは、首都圏と香川では順接・平坦(モ「モダヨ)が最も多くの回答者に選ばれていたが、岡山では疑問上昇(モ「モダノヨ)を選ぶ回答者が87.5%(16人中14人)と最も多く、首都圏の60.7%(28人中17人)・香川の54.5%(11人中6人)との間に統計的有意差が認められた( $t(53) = 2.40$ ,  $p < .05$ )。ただし、香川の回答者は平坦63.6%(11人中7人)、疑問上昇54.5%(11人中6人)と8割を超える回答者が○をつけている音調がなく、平坦と疑問上昇の両方に○をつけている回答者が3名のみで、岡山や首都圏の回答者の半数強が両方の音調に○をつけているのとは異なる様相を見せており、どちらか片方の音調しか許容しない回答者が多かったことが伺える。「よ」の音調に対応する機能という点では、順接・平坦と順接・疑問上昇は音声的バリエーションであると考えられるが、どちらの音調が選ばれやすいかという点では地域差が認められるようである。

### 3.4.2 「ね」

「ね」は順接・疑問上昇、順接・アクセント上昇(または平坦)、順接・下降(または上昇下降)の3種類の音調を取り、①聞き手からの回答要求をとまなう確認②聞き手からの回答要求をとまなわ



ない確認あるいは聞き手も同意・認識している事態の述べ立て③聞き手への同意要求をとまなう感情表出に用いられる。今回の調査項目では、①は本当だね(1)確認する、②はやるね(1)「私がやる」、③はやるね(2)「なかなかやるね」、本当だね(2)賛成するに相当する。表2-3に「本当だね」、表2-4に「やるね」の調査結果を示す。

このうち、本当だね(1)「今の話、本当だね」と確認するときは、各地とも順接・疑問上昇(ホ「ントウダ↑ネ)が最も多く選ばれており、とくに岡山・香川では回答者全員が○をつけていた。さらに、やるね(1)「私が今からやる」では、各地とも順接・疑問上昇(ヤ「ル↑ネ)が最も多く、次いで順接・平坦(ヤ「ルネ)、順接・アクセント上昇(ヤ「ル↑ネ)の順となった。疑問上昇をふさわしいとした回答者が多かったのは、この問いの状況設定において、多くの回答者が「話し手の行動(意思)を表示している発話であるが、聞き手からの回答も求めている」ものと判断したためと思われる。この設定では順接・平坦およびアクセント上昇をふさわしいと答えた回答者の比率において、首都圏と岡山・香川で差が見られた。順接・平坦(ヤ「ルネ)は、首都圏で60.7%(28人中17人)、岡山で81.3%(16人中13人)、香川で90.9%(11人中10人)となり、首都圏と香川の間には統計的有意差が認められた( $t(37) = 2.12, p < .05$ )。また、同じ設定でアクセント上昇に○をつけた回答者は岡山75.0%(16人中12人)、香川63.6%(11人中7人)、首都圏42.9%(28人中12人)となり、岡山と首都圏の間には統計的有意差が認められた( $t(42) = 2.12, p < .05$ )。

また、本当だね(2)「確かにそのとおりだ。」と賛成するときは、岡山は87.5%(16人中11名)が順接・下降(ホ「ントウダ↓ネ)を選び、この音調が最も多く選ばれていたのに対し、首都圏と香川ではアクセント上昇(ホ「ントウダ↑ネ)が最も多く選ばれており(首都圏85.7%(28人中24人)香川72.7%(11人中8人))、地域による差を認めることができる。首都圏で順接・下降(ホ「ントウダ↓ネ)に○をつけた回答者は28人中16名(57.1%)と岡山に比べると有意に少なかった( $t(42) = 2.42, p < .05$ )。同様に順接・平坦(ホ「ントウダネ)を選んだ回答者も岡山は16人中11名(68.8%)いたのに対し、首都圏28人中10名(35.7%)、香川11人中4名(36.4%)となり、この順接・平坦(ホ「ントウダネ)をふさわしいと答えた回答者数の比率において、岡山は首都圏及び香川に比べて有意に高かった( $t(53) = 2.7, p < .05$ )。この状況設定も話し手の賛成の気持ちを述べるほうに重点を置くか、あるいは感情的な表出に重点を置くかで選ぶ音調が変わる可能性がある。今回の結果から、その違いは個人差と同時に地域的な傾向もあると考えることができる。

### 3.4.3 過去の調査結果との比較

轟木・山下(2008)では、東京、大阪、岡山、香川において終助詞の聞き取り調査をおこない、地域差と共通点について考察をおこなった。今回の調査は轟木・山下(2008)でおこなった聞き取り調査に改良を加え、質問項目及び提示する音調を整理し精選する等の修正をおこなったものである。以下、轟木・山下(2008)の調査結果を「2008年調査」とし、今回の調査結果と比較・考察する。

2008年調査は、今回の調査よりも提示した音調の数が多く、「桃だよ」には順接・アクセント上昇(モ「モダ↑ヨ)、順接・上昇下降(モ「モダ↑ヨ)、低接・疑問上昇(モ「モダ↑ヨ)、低接・アクセント上昇(モ「モダ↑ヨ)、「やるよ」には順接・上昇下降(ヤ「ル↑ヨ)、低接・疑問上昇(ヤ「ル↑ヨ)、低接・上昇下降(ヤ「ル↑ヨ)「やるね」には低接・疑問上昇(ヤ「ル↑ネ)、「本当だね」には順接・上昇下降(ホ「ントウダ↑ネ)、低接・疑問上昇(ホ「ントウダ↑ネ)、低接・アクセント上昇(ホ「ントウダ↑ネ)が加わっていた。今回一つの設定で提示された音調は4種類または5種類であったが、2008年調査では7種類または8種類の音調が提示されていたということである。おそらくこのことが影響し、同じ設定・音調であっても今回の調査結果と異なるものが認められた。

まず、桃だよ(1)「あれ、何?」と聞かれて答えるときの低接・平坦(モ「モダヨ)であるが、

2008年調査では各地で8割程度の回答者がこの音調に○をつけており、今回1割から3割の回答者しか選んでいなかったのと比べると、明らかに差が見られる。ただし、この音調は聞き手と反対の意見を述べる、桃だよ(2)(梅じゃなくて桃だ)の設定において多くの回答者に選ばれているという点では今回の調査結果と一致している。これは、被調査者が2008年調査では東京22人であったのに対し、今回の調査の首都圏回答者28人のうち、神奈川16人、埼玉4人が含まれている点、また2008年回答者は30代以上の回答者が22人中8人含まれているのに対し今回の調査対象が10代後半から20代前半の大学生であったこと等の影響が考えられる。また、轟木(2013)でおこなった録音調査では、東京語話者の一部に低接・平坦の「よ」をよく使う回答者がいることが明らかとなっており、この低接・平坦の「よ」の使用実態については今後さらなる検討が必要である。

また、「ね」の順接・平坦(ホ「ントウダネ、ヤ「ルネ)については、すべての設定において、今回の調査結果では2008年調査に比べてふさわしいと答えた回答者の比率が低く、上記の低接・平坦の「よ」と同様、回答者の生育地や年代のほか、提示した音調の数により調査の精度が変化している可能性も考慮に入れなければならない。

#### 4 考察

日本語の終助詞は、話し手の心的態度を示すという点で、話し言葉において重要な役割を果たしている。終助詞はその形態の意味だけでなく、音調が加わることにより様々な意味・機能をこなうことになる。本研究は共通語としての終助詞の音調を対象としているが、終助詞は音調によってあらかず意味・機能が異なること、多くの場合共通語とは異なる地域の言葉を日常的に使用する中で方言の文末詞も用いられている。そこで、一連の聞き取り調査では、日本各地で通じる共通語としての終助詞の音調と意味・機能の対応を抽出するために、「自分では使用しないが聞けば分かる」という形で回答を求める方法を取っている。したがって、音調に対する許容度は高くなりやすく、音調を絞り込むという点ではかえって困難さを伴うともいえる。しかし、日本語の使用実態という点では、一つの状況設定に対し複数の音調が許容され、話者はその中から一つを選んで発話するというのはごく自然なことだと考えられる。そのいっぽうで、「この音調は許容に地域差がある」「この音調はまず使われない」というようなものを差し引いていくことで、共通語としての終助詞の音調を明らかにしていくことができる。

今回の調査結果から、「よ」の順接・疑問上昇と低接・平坦の区別、また「ね」の順接・疑問上昇と順接・下降の区別は改めて確認することができたものの、「ね」の順接・平坦および順接・アクセント上昇には地域差が見られ、また「よ」の順接・疑問上昇の使われる設定においても一部地域差が見られたこと、さらには2008年調査と比較すると低接・平坦の「よ」と順接・平坦の「ね」については選ばれ方にばらつきが認められること等から、これらの音調は「共通語としての音調」として考える場合は慎重に検討する必要があると思われる。

#### 5 まとめ及び今後の課題

東京を含む首都圏、岡山、香川の大学生男女55人を対象に、終助詞「よ」「ね」の音調の聞き取り調査をおこなった。「よ」の新情報提示・注目要求をあらわす順接・疑問上昇と聞き手に反する述べ立て・不満の表明をあらわす低接・平坦の使い分け、および「ね」の回答要求をとまなう確認をあらわす順接・疑問上昇と同意要求をとまなう感情表出の順接・下降の使い分けについては各地でおおむね確認することができた。しかしそのいっぽうで低接・平坦の「よ」や順接・平坦の「ね」の使用については過去の調査結果と異なるものもあり、地域によっても場面設定により一番多く選ばれる音調が異なる等の差も見られた。



今後は、東京で言語形成期を過ぎた調査協力者をさらに募る中で、男女差も考慮に入れた分析ができるよう、また場面設定に関しても回答要求の程度が被調査者によってばらつきが出ないような方法を考え、調査分析を継続する予定である。

注1 'はアクセントによる下がり目、↓は下降開始点を示している(同文献による)。

注2 ↑は上昇開始点を示している(同文献による)。

注3 近畿音声言語研究会(2008)では、モーラ間の上昇および下降を示す'と'は音声的な表記として提示されている。しかし、本稿では、ホ「ントウダネのように、音韻的なモーラ間の上昇も示すものとして使用している。

注4 「疑問上昇」は郡(1990)による。上昇調の2種類の区別は、吉沢(1960)、川上(1963)を踏襲するものである。アクセント上昇は郡(1990)の強調上昇、郡(2003)の強調型上昇と同じであり、疑問上昇は郡(2003)の疑問型上昇と同じである。

注5 実際の聞き取り調査は「よ」「ね」のほか「な」「か」についてもおこなっているが、今回は「よ」「ね」についてのみ報告する。

謝辞 調査にご協力いただいた方々に感謝いたします。

付記 本研究は平成23-26年度科学研究費による研究 基盤研究(C)「日本語音声教育における文末イントネーションの指導に関する研究」(課題番号23520632、研究代表者 轟木靖子)による研究成果の一部である。

## 参考文献

上村幸雄(1989)「日本語のイントネーション」『ことばの科学3』むぎ書房, 193-220

川上 泰(1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』16号:25-46.

近畿音声言語研究会(2008)「本号で使用する音調記号について」『音声言語VI』近畿音声言語研究会.

郡 史郎(1990)「大阪語の文末詞『か』の音調と機能:内省に基づく考察」『音声言語 IV』近畿音声言語研究会, 1-25.

郡 史郎(2003)「イントネーション」『音声・音韻(朝倉日本語講座3)』朝倉書店, 109-131.

轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について —内省による考察—」『音声言語VI』近畿音声言語研究会, 5-28.

轟木靖子(2013)「共通語における終助詞「よ」「ね」の音調について —発話資料の分析—」近畿音声言語研究会7月月例会資料, 1-9.

轟木靖子・山下直子(2008)「終助詞の音調における地域差と共通点 —東京・大阪・岡山・香川を例として—」『日本語教育』136号, 日本語教育学会, 68-77.

轟木靖子・山下直子(2013)「日本語教育における終助詞の音調の指導について —教師用テキストの作成を目指して—」『2013年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会, 254-259.

吉沢典男(1960)「イントネーション」国立国語研究所『話し言葉の文型(1)』秀英出版, 249-288.

和田 實(1969)「辞のアクセント」『国語研究』29号, 1-20.